

アーカイヴス

◎川村 毅 2002 年作

初演：2002 年 5-6 月 ザ・スズナリ（東京）、

長久手町文化の家・風のホール（愛知）、扇町ミュージアムスクエア（大阪）

ティーファクトリー 第一回公演

演出：川村 毅

初出：総合演劇雑誌テアトロ 2002 年 6 月号

初演キャスト：男Ⅱ小林勝也、女Ⅱ新井純、若い男Ⅱ笠木誠、老人Ⅱ伊藤克、

ナビゲーター・若い女・謎の女Ⅱ毬谷友子

△登場人物▽

男（60 かそこら）

女（56 かそこら）

若い男（36 かそこら）

老人（70 かそこら）

ナビゲーター（年齢不詳）・若い女（30 かそこら）謎の女（謎）

プロローグ

ありふれた五月。東京。冷気が漂う部屋。椅子がひとつ。テレビモニターがひとつ。ナビゲーターが立っている。やがてナビゲーターはリモコンでモニターをつける。眠っている女の顔が映る。女は呟く。

女 「もしも…この生に意味があるというなら…もしも…この生が続くというなら…明日が世界の最後の日になって欲しい…もしも…」

ナビゲーターはモニターを消す。

1. 拳銃貸します

年配の男がゆっくり入って来る。左半身が不自由らしく歩行補助器を使って歩いている。

男 座ってもいいかな。

ナビ どうぞ。

男 (座る) 殺風景だな。

ナビ (無表情のまま) おめでとーございます。

男 祝福か…。

ナビ あなたが六十三番目の当選者です。

男 六十三…随分な数だな…。

ナビ 初めまして。

男 …(ナビの顔をじつと見て) 初めて会った気がしないな。

ナビ 皆さん、そう言います。

男 皆さん…六十二人か。

ナビ 当クラブのナビゲーターです。インストラクターの役割も果たします。

男 インストラクター…。

ナビ ご存じのようにここはフィットネスクラブです。

男 映画館じゃなかったのか。

ナビ 閉館しました。

男 最後の上映作品は何だったの？

ナビ …。

男 滅び行く産業…。

ナビ 冷やかしのつもりでしたらすぐにお引き取りください。

男 冷やかし？いいや。喜んでいいのか悲しむべきなのか。
ナビ あなたは：（手に持ったファイルを見て）探偵ですね。では探偵さんと呼びます。応募された動機だけ伺っておきます。
男 …こんな体になったのは…
ナビ 身の上話はけっこうです。動機を聞いているのです。
男 死にたいんだ。
ナビ わかっています。なぜ応募する気になったかを聞いています。死のうと思えばどこでだって死ねます。
男 （鼻で笑い）随分な言い方だな。
ナビ 慰めの場所ではありません、フィットネスクラブですの。
男 こんな体じゃ運動は無理だね。
ナビ 想像していたものと違うと感じられたのでしたらどうぞお帰りください。
男 …（その女をじっと見ている）
ナビ （男の視線に怯まず）希望者はひっきりなしですから。
男 つまり…苦しみたくないんだ。
ナビ 誰でもそう。
男 怖いんだ。
ナビ 皆さん同じことを言います。
男 映画が好きだね。
ナビ それだけの理由でしたら映画館にどうぞ。
男 ビデオと言ってくれないところがうれしいね。映画館で映画を見たいのはやまやまだ。金を貸してくれないかね。
ナビ 残念ながらあなたは当クラブのメンバーにはふさわしくないように思われます。
男 貧乏だといけないのか？
ナビ 真剣ではないでしょう、あなた。
男 そのつもりだがね。
ナビ お引き取りください。
男 わかった。もう一度最初からやらせてくれ。
ナビ お引き取りください。
男 …そうだ。つまり、俺は…。
ナビ 帰って。人呼ぶわよ。
男 待ってくれ。もう一度…

ナビゲーターは拳銃を取り出して銃口を男に向ける。

男 唐突過ぎやしないか。

ナビ 苛酷で無慈悲なの、私。

男 本物か？

ナビ 試してみる？

男 映画みたいだな。撃つてくれよ。いいよ、こういうことをされたいために来たんだから。

ナビ 無駄口を叩くんじゃない。とつとと出ていきな。

男は歩行補助器を振り回して拳銃を叩き落とそうとするが、かわされて床に転倒する。

ナビ そううまくいくもんじゃないの。

男 （立ち上がり、ぼそぼそと）俺は他人から世話を焼かれたくない、ただそれだけのことだ：一度線路に飛び込みを見たことがあるけどよ、脳みそがばあつと散ってて、内臓どろどろ。電車は停まるし、迷惑だよ。首吊りだって目玉は飛び出るし、糞尿は垂れ流すしでぶざまなもんだっていうじゃないか。嫌だな。不快だよ、どうせ死ぬんだからかまわないってこたあないだろ。別荘で心中したカップルのことも知ってるけどよ、何考えてんだよ、あいつら。自分の別荘じゃないんだぜ、貸してくれた人のことも考えろってんだよ。

ナビ 樹海に行けば。

男 樹海か：どうもな：誰かに見ていてはもらいたいんだ：そういうもんさ。

男はうちひしがれた態でゆっくり出て行く。姿を消す瞬間ナビは声を掛けようとするが、遅い。女が入って来る。テレビモニターの女である。歩行用の点滴を刺している。

女 新しい人？

ナビ 歩いたりして、平気なの？

女 なんだか気分が良くて。今の新しい人なの？

ナビ 元気そうで何より。

女 誰なの？

ナビ あなたには関係ない。

女 大ありよ。直接影響を受けるのはこっちなんだから。探偵はどこへ行つたの？

ナビ 答える必要はない。

女 勝手にいなくなっちゃうんじゃ、ストーリーが続かないの。

ナビ あなた、探偵のこと嫌がってたじゃない。

女 でも、いったんインプットしたキャラクターだもの、どう続けていいのかわかんなくなっちゃう。参加させるなら早くして。

ナビ 今の人、知り合いなの？

女 まさか。どうして？

ナビ だってあんなに嫌っていたのに。

女 順風なだけじゃかえって不安なの。

ナビ わがままね。

女 自分でもそう思うわ。死にたい自分ってとことんわがままよ。

ナビ わがままで贅沢。

女 そう。自分で決めようとする死ぐらい贅沢なものはないわ。どうにかして。…もうすぐよ、あたし。

ナビ …ベッドに戻ったら。

女 外の空気を吸うわ。

女、歩こうとしてよろける。ナビゲーターが支え、共に部屋を出る。男が戻って来る。ナビゲーターも戻って来る。

男 あの…行くところがなくてね…先程のことは謝ります。

ナビ …座って。

男、椅子に座る。ナビゲーターはいったん部屋を出、コップと何かを持って戻って来る。

ナビ 飲んで。(錠剤を差し出す)

男 やはり、ここで殺そうというわけ？

ナビ そんな怯えた顔つきでは務まらない。

男 何のことです？

ナビ 探偵。

男は錠剤とコップを受け取り、飲む。

ナビ 目を閉じて…開いて…毒薬。

男 …。

ナビ またそんな顔をして。冗談よ、冗談。ポケットを探ってみて。

男、言われる通りにし、拳銃を取り出す。

ナビ ほうら、効き目はばっちり。

男 こういった小道具があるとやっぱり…

ナビ 小道具なんていう言い方はしないの。もつと真剣に。あんたのためだよ。
男 ちきしょう…命令ばかりしやがって。

男は銃口をナビゲーターに向ける。

ナビ そう、その顔！いい線いってる！

男 使い方を知らないんだ。（拳銃をしまう）

ナビ たくさん映画を見たでしょう、真似できればどうにかなる。登場人物はこの人達。（写真を数枚取り出し、男に渡しながら）富豪…政治家…歌手…殺し屋。

男 誰が誰とどうつながってるんだ。

ナビ それでも探偵？

男 不親切だな。

ナビ 謎。人生と同じ。

男 人生に謎などあるか。

ナビ （舌打ちし）謙虚さに欠けてるな。

男 謙虚な探偵がいるか。

ナビ 調子に乗ってきやがった。

男 ああ。

ナビ じゃあ、（男に顔を突き出し）殴ってごらん。

男 なんでだ？

ナビ 探偵だから。

男 理由がない。

ナビ 理由なんかいらない。

男 女を殴るのは気が進まないな。

ナビ 女だから殴れないだなんて。差別主義者。

ナビゲーターはいきなり男の腹部を蹴り、去る。男は椅子から落ちて痛みにならずくまる。若い男がやってきて男に近寄る。

若い男 腹痛か、やられたのか、どっちだ？

男 …（声が出ない）

若い男 だから腹痛か、やられたのか、どっちだかはつきりしろ。
男 …やられた。
若い男 （男から離れ）腹痛じゃないんだな。
男 やられた…。
若い男 だから腹痛じゃないんだろ。それなら介抱しないよ。誰にやられたんだ？

男は次第に自分の変化に気がつく。麻痺していた左半身が動く。二本の足で立ち上がる。

男 やった…。
若い男 誰をやった？
男 誰を？
若い男 死体はどこだ？
男 死体は…ありません。
若い男 じゃあ、なんで俺を呼んだんだ？
男 あんた、殺し屋だな。
若い男 面と向かって言われたのは初めてだな。
男 誰を殺そうっていうんだ？
若い男 何を言ってるんだよ、このオヤジは！
男 事件はどこなんだ？
若い男 事件は俺たち自身だ。あんた、誰かをやったんだろう？電話でそう言っ
男 たじゃねえか。
男 いつ？
若い男 留守録の時間は昨日の夜だったな。
男 それは俺じゃない、俺じゃないんだが、しかし俺なわけだ。色々教えて
男 くないか？
若い男 ストーリーを続けようぜ。
男 前のやつはどんな探偵だったんだ？
若い男 （感じが少し変わり）ルール違反じゃないんすかね。
男 俺は何も聞いてない。
若い男 （変わったままで）本当に何も知らないんだな。大変だな、これから。
男 （感じを戻し）知るか、俺の知ったこっちゃねえ！
若い男 ひとつだけ答えてくれ。ここはどこだ？
男 探偵事務所。ネオン街の真っ只中…。
男 もっと何かないのかね。

若い男 築三十年のビルの三階。明かりを消せば窓から風俗店のネオンサインが漏れて来る。明滅する原色に顔を染められてピュアモルトのグラスを握りながら、あんたは呟いた。「俺は年を取った」

男 殺し屋らしくないな。まるで映画のナレーションだ。

若い男 殺し屋だって映画は見る。いや、殺し屋にはいつだって映画館が必要だ。

部屋の呼び鈴が鳴る。

若い男 風呂場にいるからな。裏切るなよ。

若い男は部屋を出て行く。男は扉を開けた様子。女が入って来るなり男に抱き着く。

女 会いたかった…だいじよぶだった？死体は始末できた？

男 …。

女 (男の顔を見て) どしたの？何か良くないことでも？

男 わからないんだ…。

女は素早く若い男が出て行ったのと同じ方向に去る。すぐに後ずさりして戻って来る。若い男が女に銃口を向けている。

若い男 死体はちゃんとお風呂でおやすみじゃねえかよ、探偵さんよ。

女 やめて。

若い男 ビデオテープは俺が持つてるよ。

女 (はつとして男に) こいつよ！(若い男に) テープを返して！(男に) 何をぼつとしてんの！なんとかしてちょうだい！

若い男 ビッグ・バッド・マミーからもらったんだ。あんたのお知り合いのビッグでバッドなマミー。

女 何を言ってるの。知らないわ、マミーなんか。

若い男 あんたは俺達を滅茶滅茶にしやがった。妹を返せ。あんたのせいで遠くに行っちゃった妹だ。

女 あたしのせいじゃない。

若い男 (銃口を移動させ) その湿った股ぐらが知ってるだろうぜ。

女は若い男の拳銃を蹴る。男が若い男の腕を掴む。女は若い男の背後に回り、男の歩行補助器を持って若い男の後頭部を打つ。相手がひるむと何度となく

歩行補助器で打つ。若い男は気を失う。

女 殺して。

男 ∴。(何も言えない)

女、怯えたかのような素振りで男に抱き着く。

女 いつもそう。いつもこんなふうに不幸がやって来る。わかってくれるでしょう、あなたなら。あなたは言ったわ、「俺たちは同じ人種なんだ」って。殺して。愛してるなら。

男 あなたを殺せ、と。

女 (素早く男から離れ) この男よ。(走り去る)

男は若い男をしばらく見下ろし、ジャケットのポケットを探る。大量の新聞の切り抜きを見つける。男はそれらを読み始める。辺りは暗くなる。テレビモニターに男の顔が映る。傍らにはナビゲーターが立っている。男は眠っている様子。寝言のように呟いている。ナビゲーターはその様子を見ている。

男 「俺は年を取った∴俺たちは同じ人種なんだ∴俺はやつらに言われた台詞を呟き、俺本人になろうと試みた。切り抜きの新聞記事は女とビッグ・バッド・マミーのことだった。女は次の政権を狙う野党の党首だった。聡明でやり手で熱い情熱と冷たい判断力で人気だった。彼女の夫である富豪が後ろ盾となって党の運営のために出資していた。俺は車を走らせた。古い型の車だ。ハンドルがあらかじめ道程を知っているかのように夜の濡れた舗道を仕切っていた。多くの人生がそうであるようにストーリーの一切は書かれている。俺のこのナレーションも、自分で話しているという実感が無い。これは俺の言葉ではない。どこかに姿を隠しているシナリオライターが書いた台詞だ。しかし間違いなく俺の台詞でもある。ハンドルがヘッドライトに浮かび上がった猫の死体を避けた。対向車線のトラックドライバーがひやりとしたのがわかった。俺は感じた。夜の細部が手に取るようにわかる。酒場の片隅の呟き。高層ビルのオフィスのけだるい疲労感。路地の暗がりの湿り気。車にはねられた猫が最後に見た光景…」

ナビゲーターはモニターを消す。

2. まわり道

車椅子に乗った老人がいる。黒メガネである。じっとして何もしない。
女が忙しげに入って来て老人の前を横切って去る。

老人 眠れないのか？

女、再び出て来る。

女 （横切ろうとして立ち止まり）何か言いました？

老人 退屈で眠れやしない。

女 退屈でいられることは幸せですよ。

老人 そんなことあるもんか。どんな境遇だろうと老人は老人だ。年を取るってことは退屈に馴らされていくってことだ。

女 それならそれでいいじゃないですか。

老人 こんなはずじゃなかったんだがな。

女 ご自分で望まれたんでしょう？

老人 それにしてもだね。

女 あたしのせいと言いたいのかね。別のストーリーを選べばよかったのに。
老人 映画にストーリーはいらない。

女 そう思ってたらしやるなら、それでいいじゃありませんか。

老人 今のこれは誰のストーリーだ？

女 あなたでしょう。

老人 そうか……だからこんなに静かなんだ。静かなスペイン映画。盲目のひとりの老人。悲しみもなく。喜びもなく。

女 おやすみなさい。

老人 居間の絨毯が汚れていたな。

女 ……

老人 あれは変えたほうがいい。明日新しいのを注文しよう。古いやつは裏庭の
焼却炉で燃やせばいい。

女 ……ええ。

老人 なぜ焼却炉を使わないんだ？

女 だって匂いますでしょう。

老人 我慢するさ。少々のことは我慢しなければ望んだものなんぞ勝ち取れやしない。

女 寝室までお供しますわ。

老人 心配はいらない。

女 おやすみなさい。(去る)

老人 おまえも眠れないんだな。わかつてるよ。眠れない人々。これが私の映画だ。何かが起こる必要はない。眠れない夜。まともなのは私だけだ。起きていても見えるのは闇ばかり。眠る必要がない。

若い男が現れる。

老人 君だな。

若い男 はい。

老人 誰にも会わなかったらうね。

若い男 はい。

老人 金か？

若い男 至急必要になって。もう私ひとりになってしまいました。

老人 他は捕まったのか？

若い男 ええ。

老人 逃げるための金が欲しいのか？

若い男 違います。

老人 やるのか？

若い男 ええ。

老人 何をやる？

若い男 今は言えません。

老人 ；わかった。

老人は懷から札束を取り出す。

若い男 (受け取り) ありがとうございます。

老人 感謝するな。退屈しのぎだ。思う存分世間を騒がせろ。

若い男、深々と礼をして去る。微笑む若い女が現れる。

老人 そうら、眠れないのがまたひとり現れた。こっちへ来な。

若い女 何してくれるの？

老人 お話。

若い女 もう飽きた。

老人 そいつは困ったな。

若い女 新しいお話をちようだい。

老人 新しいお話か、こいつは傑作だ。おかしい言い回しだ。生きている死体というのと同じだ。そうだ、こいつをやろう。（黒メガネの下から義眼を取り出す）そら、受け取るんだよ。

若い女 （近づき受け取り）星ね。

老人 本当は本物がいいんだろうが、なあにそんなもんはつまらない人生が見えるだけだ。毎日毎日私はそいつに映画の記憶を埋め込んでる。透かして見てごらん。色々な映画が見えて来るはずだ。

若い女 なんにも見えない。

老人 部屋をもっと暗くするんだな。

若い女、部屋の明かりを消す。本当の暗闇。

若い女 見える見える。女の人が裸になってる。

老人 おまえにはまだ早過ぎる。他のにしな。

若い女 嫌だ、これがいい。男の人も裸になってる。

老人 こっちに来な。歌のお稽古を始めるよ。

暗闇のなかで何か物音がする。急に明かりがつく。男がいる。明かりは男がつけたようだ。若い女がけらけら笑いながら老人から離れる。老人のズボンのベルトが外れている。

男 失礼。（去ろうとする）

老人 いいんだ、いいんだ。

若い女 （真似て）いいんだ、いいんだ。（男に近づき）ほら、星が降ってきたの。（義眼を男に見せる）

老人 初めて会ったか？

男 あなたとですか？

老人 この子のことだよ。

男 …（やや戸惑いつつ）恐らく。

老人 うちのやつと遠縁の子だね。ミュージカルの舞台に出たいというんで、うちで面倒を見てやってるんだ。今はまだレッスンの最中だが、頃合いをみて勝手に預けようと考えている。

若い女 そうなの。ミュージカルに出るの。

老人 何が好きなんだっけ？

若い女 魔法使いが出るやつ。歌う？

老人 やめとけ。今は夜中だ。（男に）そうだろ？夜を走って来たんだろ？

男 実感がないままに。

老人 ということはここはまだ私のストーリーということだ。あんたの探偵映画とは随分違うよ。

男 わかりませんね。：あなたは富豪：ですね？

老人 あんたのストーリーではそう呼ばれているらしいな。

男 (若い女に) 歌手というのは：(写真を取り出し) おかしいな…。

若い女 虹の歌なら歌えるよ。

老人 最初にあんたの事務所に行ったのはこの私だ。妻の素行調査を頼んだ。だから、ここにあんたが来たということは何か報告しに来たってことだな？

男 ：はあ。

若い女 (笑う)

老人 まあいいだう。結果がどうであろうと何をしようってわけじゃない。せめて嫉妬心でも湧き上がってくればいいんだが、どういうわけなんだろうね。：愛してるというのに。

若い女 やめて！

老人 ごめんごめん。そうだった。愛してるのはおまえのほうだった。

若い女は義眼を放り投げて、走り去る。

老人 怒ったな。愛しいおまえ、私を見捨てないでくれ。

男 羨ましい限りですな。

老人 老人映画だよ、あんた。老人は映画のなかではいつでも善良だ。その上弱々しく、退屈だ。(舌打ちする) 私が望んだのは本当の老人だ。欲望を捨て切れない老人。年を取れば取るほど妄執が強くなるというかね：あんた、わかるか、年寄りが枯れていくなんていうのは嘘だよ。若い連中を欺くための芝居だよ。金を持って全部が自分の思い通りになる。表で色々なことが起こる。仕掛けているのは私だ。私の周りでは何も起こらない。どうだい、悪党映画だろう。ところがここもまた退屈だ。どういうわけか、まるで変わったという実感がない。退屈で死にそうだ。土台、ブルジョアの老人なんて粹なストーリーではない。成り上がりは成り上がりだ。あんたが羨ましいよ。探偵ときたか。まだ若いからな。

男 年を取りました。

老人 まだまだ若いよ。可哀想に。：私の目玉を拾ってくれないか。

男は言われた通りに捜し当て、老人に渡す。

男 目が悪いんですね。

老人 失明した映写技師。話にもならない。(と黒メガネの下で義眼を入れる)
男 映写技師をしていた？

老人 もっとも映画館自体が軒並み閉館しちまったからな、遅かれ早かれお役御免だったんだろうが。自分の手で回した映画の記憶だけだな、退屈ではないのは。

男 そのなかの好きなのを選べば良かったのに。

老人 西部劇か。無理だ。

男 退屈でなくなるかも知れない。俺のストーリーにつき合ってもらえれば。

老人 まあ、自然とそうなるわけだ。運命共同体だからな。

男 よくわからないな。

老人 やっていくうちにわかる。

男 今、こうして俺とあなたが話している今、これは何なんです？

老人 あんたのストーリーに移っているのかも知れないな。ということはあんたのほうが死への欲求が強いということだ。

男 死にたいです。

老人 なんでだ？若いつてのに。

男 探偵が答えるような台詞じゃないな。

老人 確かにそうだ。悪かったな。すぐ規則破りをしちまう。ぼちぼち私は退散だな。押してくれないか。

男は老人の車椅子の背後に回る。

男 もう少しヒントが欲しい。

老人 ヒントか。深夜。拳銃。女。あんたの映画の題名にはこのなかのひとつは必ず使われてるだろう。

男 思い浮かばないな。

老人 たくさん映画を回したな。

男 何本ぐらい？

老人 数えちゃいない。俺は映画ファンじゃない、映写技師だ。いけないな、富豪がこんな台詞を言うかね。年寄りつてのは自分の昔ばかりしゃべりたがる。役に成り切れないんだ。くたびれた。寝室まで押してくれ。

男、車椅子を押す。男、戻って来る。と同時に若い女と鉢合わせになる。

若い女 何しに来たの？

男 ；何しに来たんだっけ。

若い女 頼りないのね。

男 あんたも登場人物なんだな。

若い女 シーッ！

男 わかったぞ。（と再び写真を取り出し）この歌手の子は自殺を完了させたんだな。

若い女の顔付きと立ち居振る舞いが変わる。不意に男は意識を失わせが、男はすぐに意識を取り戻す。立ち上がろうとするが、体がいうことをきかない。若い女からナビゲーターに戻った女が男の歩行補助器を携えて戻って来る。

ナビ ルール違反。（歩行補助器を男に差し出し）帰って。

男 聞いてないぞ。

ナビ 駄目ね。役に徹し切れない人は。

男 あの年寄りのせいだ。

ナビ あなたの映画は終わり。

男 狡いじゃないか、あの年寄りはあるなりに自分のことをしゃべったぞ。

ナビ 大目に見てるの。年寄りだから。

男 俺は何も説明を受けてない！ルール違反はそちのほうだ。

ナビ 身の上話はいらなと言ったでしょう。

男 わかった。わかったから。もう一度、もう一度だけ。

ナビ ；いい？今度こんなことがあったら本当に帰ってもらうから。

男 わかった。

ナビゲーターは若い女になる。

若い女 （倒れている男を見下ろして）どしたの、転んだの？

男 （恐る恐る立ち上がって、体が戻ったことに喜び）ああ。転んじやつて。

若い女 （歩行補助器を取り上げ）何これ？

男 ；これは、抜け殻みたいなものさ。

若い女 蝶々なの？

男 そんなにきれいとは言えないがね。

若い女 蛾ね、あんた蛾でしょう？

男 ああ。探偵だからね。

若い女 蛾は嫌い。（去ろうとする）

男 待つて。もう少しつき合つて。もう何が何だか…(若い女の鋭い視線に気がつき) いや…もう少し、おじさんと一緒にいないか？

若い女 何をするの？

男 歌を聞かせてくれないか？

若い女 嫌だわ。あんたには。

男 困ったね。

若い女 お稽古ならいいけど。

男 そうか。じゃあ、それをやろう。

若い女 わかったわ。

若い女は男のズボンのベルトを外しにかかる。

男 (逃れ) ちよつと君…。

若い女 駄目ね、お稽古嫌いは。

男 (ベルトを直しながら) 女の人を知っているね？ここに住んでる女の人だ。

若い女 ああ、あの人。

男 いい人かね？

若い女 あたし、知ってるよ。お姉ちゃんが向こうの部屋で知らない男の人をナイフで刺したの。

男 そうか…。

若い女 お姉ちゃんは悪い人。あたしは表に出てはいけませんって言うの。

男 お姉ちゃんは本当に君のお姉ちゃんなのかい？

若い女 お姉ちゃんはお姉ちゃんよ。

男 お姉ちゃんのことをもつと話してくれないかな。

若い女 なんて？

男 知りたいんだ。

若い女 好きなんですよ？

男 …まあ。そういうことになるのかな。

若い女 知らない！

若い女は男に体ごとぶつけ、倒れた男に飛び乗ってベルトを外しにかかる。女がやって来る。女は若い女の背後に回り、両手で両肩を掴む。若い女ははつとする。男から離れ、逃げようとする。

女 頼みたいことがあるの。

若い女 （立ち止まり）…わかった。（その言い方はそれまで男達を相手にしていた時のものとは違う）
次の演説の草稿を書いたの。読んでみてくれない？

女は若い女に草稿の束を渡す。若い女は受け取ると、凄まじい速度で読み上げていく。

若い女 読んだ。

女 率直な感想を言っちょうだい。

若い女 最低。

女 どこが？

若い女 全部。

女 どうして？

若い女 理想ばかり。

女 それがなくてどうするの。自信がなくなったわ。やめようかしら。

若い女 演説、どこでやるの。

女 街頭。

若い女 それならできるかも知れないけど。

女 できるだけオーバーアクションでやるつもり。

若い女 やって見せて。

女 （男に）まだいたの。

男 いや…。

女 …何か言うことがあつて？

男 言うことはないが、聞きたいことがある。ビデオテープとは一体何のことだ？ビッグ・バッド・マミーとは誰のことだ？

女 （鼻で笑い）協力的でないのね。

男 協力的じゃないのはあんたのほうだろ。

女 今夜はもう帰って。

男 このままじゃ帰れない。

若い女 帰りなさい。

男 （若い女に）まるで別人だな。（女に）あんたも。カマトトどもが。

女 お引き取りください。ここはもうあたしの世界なんですから。

男 死体はどうするんだ？風呂場の死体だ。

女 脅迫ね。

若い女 かまっちゃだめ。

男 いいか、覚えとけ。俺は女の愛なんざ必要としない男だからな。

男、去る。

女 纏わりついて。嫌な男。

若い女 訴える？

女 いいえ。まだどこかで利用できそうだから。いざとなったら全部あいつに罪を被せればいい。

若い女 成長したね。

女 嫌な女かしら？

若い女 素敵よ。政権を取ったら独裁者になってね。

女 誰にも逆らわせない。楯突く連中はみんなゴミ箱行き。(若い女の食い入るような視線に気がつき)嘘。あなたはいつもあたしを嫌な女にしようとする。あたしが望むのは全員が自由と平等を感じながら生きることのできる平和な社会。

若い女 幼稚。

女 政治家は幼稚なものだと思うの、あたし。

若い女 素人の理想。

女 そう。素人政治家が理想を通そうとしてしまうの。だから最後は殺されるの。群衆の前で華々しく。狙撃されて。でも時間がないわ。

若い女 焦らないこと。人気は不動になったから。後は男達が勝手に争って自滅するのを待っていればいい。

女 志し半ばで暗殺なんて嫌。せめて政権は取りたい。どうしても。

若い女 やっぱり権力が好きなんだ。演説、やって見せて。

女 (草稿を手にして)腐敗。

若い女 いいんじゃない。

女 戦争。

若い女 迫力不足。

女 テロ。

若い女 実感がないのね。

女 難民。

若い女 わかりにくい。

女 失業。

若い女 表現力不足。

女 貧困。

若い女 直接過ぎ。

女 教育。

若い女 説明過剰。

女 国境。

若い女 難しい。

女 変革。

若い女 ひどい。

女 自由。

若い女 最悪。

女 平等。

若い女 最低。

女 …もうやめるわ。

若い女 続けて。いい演説よ。

女 あたしは何を考えているかわかる？

若い女 目の前の群衆。

女 死んだ家族のこと。

若い女 センチメンタル。

女 政治は感傷から始まる。

若い女 違う。

女 倫理は感傷を殺すこと。感傷を殺して最後は感傷に戻っていく、それが

政治。わかってきたつもり。(草稿に目を落とす) 自由と平等。明るく

平和な社会。

若い女 やっぱ最低。最低だから最高…。

老人が杖をついてやって来る。

老人 深夜の演説か。やっぱ眠れないんだな。

女は老人に抱き着く。

女 恐いの。

老人 おまえなら出来る。おまえは人を引き付ける不思議な力を持っている。

女 本当？

老人 本当だ。

若い女 (ふたりに聞こえないように) 嘘だわ。

女 ずっと側にいて。

老人 いったって私は側にいるさ。信じているよ、おまえのような女性がこれ

からの社会には必要なんだ。人々を良い方向へ導いて行くのはおまえだ。

女 出来るかしら。
老人 当たり前だ。

女 (老人から離れ、晴れやかに若い女に) 歌って。あなたの得意のあの虹の歌。

若い女 なんで？
女 未来のために。

若い女、ためらいつつ歌う。

女 もっと大きな声で。

若い女、再び最初から歌う。女と老人はミュージカル映画よろしくうつとりと見つめ合い、手を取り合う。やがて女は歌に合わせて軽く踊り始める。

3. アスファルト・ジャングル

椅子で目覚める男。傍らに歩行補助器。左半身が動かないことを確認する。ナビゲーターがつかつかと入って来る。

ナビ 駄目ね、あなた。

男 何が？

ナビ 自分のことばかり考えていて。主役はあなただけではないの。

男 俺がなにかしたか？

ナビ 彼女の映画の時は、あなたはしつこくてずる賢い、金目当てのインチキ探偵なんだから。

男 冗談じゃない。俺はそんなじゃない。

ナビ あなたの映画の時は、それは好き勝手にして結構。でも他人の主観になったら、その主観に役柄を合わせて。

男 誰の主観か、どうやって見分けるんだ？

ナビ 場の空気を察して。いい大人なんだから、わかるでしょう？

男 (舌打ちし) まいったな。

ナビ わかってきた？ここは死のコミュニケーションなんだから。

男 死ぬのにも他人の顔色窺えつつのか、それが嫌で会社を辞めた俺に！

ナビ えらそうな口を叩かないことね。ひとりで死ぬことできないくせに。あなただけにそうしろと言ってるんじゃないんだから。彼女だってあなたが

主観の時にはあなたに合わせていたでしょう。

男 みんなで仲良くお芝居ごっこか！

ナビ 生きていくってことはそういうことでしょう？

男 何言ってるんだ、あんた！俺は死にたいんだよ、死、死、死、死ぬことにしか興味がないんだよ！

ナビ 出て行け。勝手に死んで。

男 どうもまだよくわからないんだな。

ナビ 死のうって人間が悩まないの。

男 ふと気がついたんだが、映画のなかで死ぬってことは、参加しているメンバーのなかの誰かに殺されるということなのか？

ナビ …。

男 ということとはだな。反対に俺も誰かを死なせる、いや、殺す立場になるというわけだ。…ははあ、わかつてきちまったぞ。フィットネス・クラブってのは殺しのレッスンでコミュニケーションとやらはお互いに殺し合うということか。

ナビ …。

男 答えないな。凶星なんだろう？

ナビ …：あなたがそういうことを心配することはないの。

男 俺は人殺しになって死ぬのは真っ平だぞ。

ナビ あなた方が殺し合うなんてことはありません。

男 じゃあ、誰が死なせる？

ナビ 事故。

男 そのシナリオは誰が書く？

ナビ 運命。悲劇。

男 あんただな。馬脚を現しやがったね、ナビさん。まったくあんたは役者だよ。最初に映画のなかで会った時、ミュージカル志望の女はあんたに似た他人と信じる場所だったよ。なるほど、ナビさん、文字通りナビゲーターというわけだ。手を替え品を替え、人を導いていくというわけだ。俺を六十三番目といったな。そういうことなら六十二人死なせた、六十二人殺したんだな。いや、まだ死んでいないのがひとり、ふたり、三人いるから、五十九人ってことか。

ナビ まだ探偵でいるつもり？勘違いしないで。ここはもう現実だよ。

男 エンドマークは出ちやいないね。

ナビ 最初に思った通り。あなたは当クラブには不適切な方の方です。お引き取りください。

男 出て行くよ。出て行くとも。場の空気を読み取れだど。冗談じゃねえ。そういうった人生に嫌気がさしたから死にたいんだ！（歩行補助器を身につ

けて立ち上がる）出口がわからなくなったな。

ナビ 入って来たところ。（去る）

男 ちきしょう！

男、ナビゲーターを追おうとするが歩みが遅く、諦める。反対側に行く。そうするうちに冷静さを取り戻していく。モニターに街の映像が映る。

男 確かに出口は入って来たところにあつた。いつもの通り人より倍の時間をかけて降りる。よりによってこのクソビルのエレベーターは故障中ときている。しかも階段の惨状ときたら。デリバリーのピザ屋の空き箱、黴びの生えた旅行用カバン、クマネズミの死骸は干からびて、ドバトの死骸は大きく羽を広げている。向かいの金融業の看板が見える踊り場には人間すら転がっている。死んでいるかはわからない。外は嫌になるほどの晴天だ。そうだ、この感覚は映画館から表に出た時と同じだ。出てすぐの路上には酔っ払った連中がよるめきながら護身術のまねごとをしている。すぐ人を殺したがるクソガキどもから身を守るためだ。俺は出て来たばかりのビルを見上げる。倒壊を待つばかりの灰色の建物。二度と足を踏み入れることはないだろう。十分歩けばもう人込みのなかだ。現実の光景になぜか俺はフィルムのざらつきを感じている。イタリア映画のように日が落ちて、フランス映画のような夜がやって来た。映画か…ちきしょう、何が映画だ。映画が好きだという人間にろくなやつはいない。

救世軍のラッパの音が聞こえて来る。

男 公園には男達が集まり、救世軍の街頭給食に行列を作っていた。列の最後はどこだろう。

救世軍の説教がスピーカーを通じて聞こえて来る。

救世軍の声 「皆さん、皆さんは今幸福ですか？バカなことを聞くものじゃない、俺たちが幸福なわけないだろう、とそんなふうに思う人が大半ではないでしょう。自分ばかりが幸福じゃない。しかしある機関が世界中の人々にアンケート調査をして統計を取った結果、自分を幸福だと思っている人はほとんどいないということが判明されています。今皆さんから見えるビルのなかで働く人々も行き交う車のなかの人々も自分を幸福だと考えている人はいないので。幸

福とは何でしょう？聖書にはこうあります…」

若い男が街頭給食のカレーライスを持って歩いて来る。男と若い男は互い気がつく。若い男は立ち去ろうとする。

男 おい、ちよつと。

男は追おうとしてよろける。若い男がそれに気がついて戻って助ける。男は若い男の意外な行動に驚く。

男 あ、どうも。

若い男 不便だな。いつからだ？

男 …三年前に脑梗塞やって。

若い男 俺のオヤジと同じだ。一年後に死んだけどな。食うか、カレー。まだ手つけてないぞ。

男 あんたのдар。

若い男 俺のことは心配すんな。やるよ、カレー。

若い男はカレーライスを男に渡して去る。男は路上に腰を下ろし、口にする。若い男が新たなカレーライスを持って戻って来る。

男 早いなあ！

若い男 生きる知恵だ。

男 …死ぬんじやなかったのか？

若い男 それまでは元気でいないとな。

若い男は立ったまま食べる。

男 …俺はもうやめたよ。

若い男 早かったな。

男 代わりの人間が探偵をやるんだろな。

若い男 どうなんだかな。

男 やりたい人がいなかったらどうすんだ？

若い男 あの女がやるだろ。

男 ナビゲーターのことか。

若い男 ああ。

男 あのかソ生意気な女。

若い男 心配はない。探偵をやりたがる人間はたくさんいる。あんた、ほんとにやめたのか？

男 やめてやったよ。最後にあのアマ、ぶん殴ってやったよ。

若い男 もったいないな。

男 そうかな。

若い男 続けりや、いいこともあったろうにな。

男 なんて、あんたにわかる？

若い男 誰でも初回は戸惑いの連続だ。そのうち慣れて楽しくなって来る。俺は今日で三回目だ。ぼちぼちだな。多くても五回で死んでくれって言われてるからな。後が詰まってるらしい。

男 あんたはどういう映画をやってんだ？

若い男 だから殺し屋だよ。

男 あんたが主観の時だよ。

若い男 殺し屋の一生だよ。

ふたり、しばらく食べる。

男 前の探偵はどうなったんだ？あんたが殺したのか？

若い男 そういう筋書きもあり得ただけだな。最後のところで裏切りやがった。

男 裏切った？

若い男 全部放り投げてとんずらだ。

男 生きてるのか？

若い男 多分な。

男 街のどこかで？

若い男 いいこともないだろうにな。生きることに関わった。粋じゃないな。

男 粋じゃない、か？死ぬことは粋か？

若い男 当たり前だ。

男 ダンディニズムか？

若い男 死は生きる希望だ。

男 あんたにとっちゃ、さしずめ俺も裏切り者だな。

若い男 いや、あんたはまだストーリーに絡んでないからな。これからどうすんだよ。生きて行くのか？

男 まさか。

若い男 辛いだらうな。こちとら気楽でいいぞ。死ぬと決まってるんだ。

男 五体満足だったのに。しかも若い。まだまだこれからだろう。

若い男 (男をじつと見つめ) バカか、あんた。

男 ああ：悪かったな。

若い男 さあてと、食った食ったと。どうすつかな、どっかに盗みにでも入るかね。どうだ気楽でいいだろ。あんたも来るか？

男 足手まといになるだけだろ。

若い男 そうだったな。映画じゃなかったんだ。

男 殺してくれないか。

若い男 …。

男 俺を。

若い男 理由がないな。

男 そうだな：そうだ。ビデオテープだ。あんたが持っていたビデオテープを俺が奪おうとしている。怒ったあんたは俺を殺すと。

若い男 ありや嘘だよ。ほんとはビデオテープなんか持つちやいない。

男 それなら：死体だ。風呂場の死体はどした？

若い男 あのままだ。

男 卑しくてずる賢い俺はあの殺しの容疑をあんたにかけようとしている。どうだ、頭に来ないか？

若い男 どうもな…。

男 わがまま言っつてんじゃねえや、この死に損ないが！

若い男 なんだと。

男 死にてえだと。粹だと？阿呆面下げて高級なことほざいてるんじゃねえよ。自殺つてのはな、教養のある人間のやることなんだよ。てめえはせいぜい盗っ人だろが、筋違いなこと考えるんじゃねえ。職を探せつてんだ、バカがつ！

若い男 バカか、俺がか？

男 ああバカだ。社会の屑だ、屑は屑らしく生きろ！

若い男 てめえ！

若い男 若い男は男の首を絞めにかかる。が、不意にやめる。

若い男 おっとつと、あぶねえあぶねえ。てめえの猿芝居に乗っちゃまうところだった。

男 (ゆっくりと立ち上がり) ちきしょう…。

若い男 おい、立ってるぜ、あんた。

男 (自分が歩行補助器なしでいることに気がつく) どしたんだろ、俺。

若い男 （新聞を取り出し） 富豪が殺された。

男 （新聞を受け取り、読む） 「風呂場で溺死」

若い男 そいつは嘘だね。

男 誰がやったんだ？

若い男 死体に会って聞いてみるんだな。

4. 恐怖のメロディ

死体置き場。ストレッチャーの上に白布で覆われた死体が一体。女が入って来て死体を前にする。白布を取り、顔を確認する。老人である。

女 間違いません。この人です。色々ご迷惑をおかけしました。…はい。ずっと遊説に回ってしまして。今朝電話で知らされました。あの…この人とうたりきりにしていただけませんか？…ありがとうございます。

女はさらに白布を取り、老人の衣服のポケットの中身を探る。部屋の隅の暗がりから声がする。

謎の女 捜し物かい？

謎の女は闇に沈んで見えないが、女には声だけでわかったようではつとする。

謎の女 あたいの居場所を知りたかったんだろ？そうだろうと思って来てやつたんだよ。悪党仲間だったからね、このジイサンとは。

女 ひさしぶりね。会いたかったわ。

謎の女 どうだか。

女 よく入って来れたわね。

謎の女 この署長はうちのお得意だからね。縛られるのがお好みでね。仕事じや悪党縛ってばかりだからな。（哄笑）

女 声が大きいわ。

謎の女 聞かれちゃまずいことでもあんのかよ。

女 相変わらずね。

謎の女 相変わらずといえばあんたも相変わらずだよ。

女 あなたほどじゃないわ。

謎の女 まったくこっちが会いたい時は逃げてばかりだよ。

女 逃げてはいないわ。忙しかったのよ。

謎の女 あの子は元気かい？

女 ええ。幸せそうよ。

謎の女 可愛がってやんな。

女 あなたに関係ないわ。何が欲しいの？

謎の女 おっとつと。こっちの台詞だよ。探偵まで雇って何しようってんだい？脅しをかけてきたのはそっちでしょう。

謎の女 嫌な言葉。誤解してるよ、あんた。こっちはただこういうもんがあるって正直に言ってるだけなんだから。

女 卑劣ね。隠し撮りなんて。

謎の女 なかなかの興奮物だよ。

女 返してちょうだい。

謎の女 返して？（笑い）もともとこっちのものだよ。

女 いくら欲しいの？

謎の女 ほうら、ほらほら。

女 何よ。

謎の女 そういう態度が気に入らないんだ。

女 金額をいいなさい。

謎の女 人間のメンツってのはいくらぐらいなんだろうねえ。

女 何を言ってるの。

謎の女 消そうだったって過去は消えないよ。あんたにとっちゃ昔のことでも、あたいらは今も昔と同じに生きてるんだ。そのあたいらをあんたは無いものにしようとした。あたいらのメンツを踏みにじった。

女 何をしたっていうのよ。

謎の女 あんたはまずあの子を囲って真相が表に出るのを封じた。そして殺し屋を雇ってあたいを殺そうとした。ところがビデオテープのことを知って殺せなくなり次に探偵を雇った。ビデオテープを奪った後にあたいを殺そうと。

女 すごい想像力ね。サスペンス書いて懸賞に応募すれば。

謎の女 あんたの近くで殺し屋がうろついていることは知ってるんだよ。

謎の女 どこかで話が混線してる！本当のことを言うわ。探偵を雇ってテープを探そうとしたのは本当。でも殺し屋なんかあたしは知らない。（死体を指し）この人よ、この人が雇ったんだわ。

謎の女 嘘をつきな！ジジイがあたいを裏切るわけがない。

女 ねえ、これは誰の世界？誰の映画？

謎の女 ルール違反！

女 うるさい！

探偵が入って来る。

女 （探偵に気がついて）そうよ、あんたよ。あんたが参加し始めてから何かおかしくなってきた。ここはあんたの主観なんでしょう？

男 わからない。

女 間抜け！

女は男に食ってかかるように見せかけて男のポケットから拳銃を奪い、謎の女のいる闇に向けて数発撃つ。呆然としている男に拳銃を握らせる。

女 テープはその暗がりにあるはずだから。取って来てちょうだい。これでちゃんとストーリーが進むはずだから。（去る）

男は暗がりに注視する。マッチが擦られる。闇に謎の女が浮かび上がる。椅子に腰掛け、葉巻に火をつけようとしている。黒いアイパッチにステッキ。女の撃った弾が当たったらしく、白いシャツの胸に血が滲み始めている。

謎の女 （ゆっくり葉巻を吸い）大丈夫。死ぬにはまだ早過ぎる。

男 あんたは…

謎の女 正確に呼んでくれないと、夜の闇に消えちゃうよ。

男 …ビッグ・バッド・マミー。

謎の女 それが誰だか知ってるのかい？

男 未成年売春業者の大元締め。

謎の女 おやおや、そういうことになっちまってるのかい。あたいはただの女だけの園の園長先生さ。ビッグでもバッドでもマミーでもない。わかっただろう？あの女はうちのお得意様だったのさ。ひとりの子にご執心だね。十五歳だったな。全部あの女が仕込んで自分好みのネコに育て上げたのさ。ところが今の地位に就いてからというものナシのつぶてだ。やりまくりたおして未払い金八千三百万。取り立てを始めて最終的には払わせたが、その時の態度が気に入らなくてな。慰謝料をもらわないと割に合わない。こちら精神的打撃つてのを被ったんだ。

男 ビデオテープには…

謎の女 ああ。女とあの子が素っ裸でな。（哄笑）

男 テープをください。

謎の女 今は持ってないよ。残念でした。

男 どうすればもらえる？

謎の女 男は信用できないね。(老人を指し) あんたがやったのかい？

男 まさか。

謎の女 そうか。やつぱりあの女がやったんだな。しゃあしやあと芝居しやがって。とことん男に成り下がったね、あの女。(立ち上がり、歩くがよるける。男が支えようとすると) 触るな！この男がっ！

男 (拳銃を取り出し) テープをよこせ。

謎の女 (笑い) 撃つてもいいんだよ、探偵。もう撃たれてんだから、あたい。

謎の女はステッキを鳴らして悠然と去る。男は撃つことができない。

男 ちきしょう。

老人 (目を開けて) 完敗だな。

男 (驚き) ひっ！

老人 あんなもん、撃つちまえばいいんだよ。

男 死に損なつたな、おとつあん！

老人 どうやらそういうことらしい。他人の映画のなかで死んでも完全には死なないらしいや。殺される場面もなかったんだからな。新聞の記事見てみんな「えっ」てなもんだ。失礼な省略だよ。記事もあんなじや小さすぎる。

男 見えるんじゃないか。

老人 盲人というのは映画で望んだ設定だ。

男 映写技師というのも嘘か？

老人 あれは本当。(ビデオテープを取り出し) ほら。これが欲しいんだろ。

男 これが、本当に？

老人 ずっと前から俺が手に入れてたんだよ。片目の女からだ。やつに妻の未払い金を払ったのは私だ。そのときに彼女からもらった。やつは私の昔の愛人だ。テープはあんたにやるよ。好きにしな。

男 どうも。(受け取る)

老人 どうするつもりだ？

男 わからない。

老人 君は、妻と寝ただろう？

男 わからない。

老人 何も知らないんだな。テープをネタにして妻をいじめるがいい。

男 わかりません。(去る)

老人 (ストレッチャーから起き上がり) みんな行ったな。よおし、どうやらや

つと私の映画の番が来たようだな。(黒メガネをかける)何も見えなくなつたと。墓場まで何マイル、エンドマークまで何フィートとくらあ。出ておいで。新しいお話をしてあげよう。

若い女が出て来る。若い女の様子だが黒いアイパッチをして、フィルム缶を手にしている。

老人 このあいだ頼んだものは持つて来てくれたかね。

若い女 忘れてないわ。

老人 アーカイヴスの館長さんは親切だったかね？

若い女 うん。あたしががんばった。クッキーも食べたよ。

老人 そいつは良かった。じゃあ、中身を出して。

若い女は映画のフィルムを取り出す。

老人 俺の体に巻き付けるんだ。音楽は例のやつで。

例の音楽が流れる。若い女は老人の上半身にフィルムを巻き付ける。

老人 そうだ、いいぞ。見えてきた、見えてきた：アイリス・インで：淡いカラーか：路地の奥に建つ古い映画館だ。大通りからは映画スターのペンキ絵が見える。なぜかみんな猿顔だ。まったく似ていない。腰の曲がった老婆と一匹の猫が目の前を横切っていった：モギリはいない。緑色の自動販売機。釣銭が落ちる。骨壺の内側で鳴る骨のようだ。ロビーには誰もいない。フィルムが回る音の漏れる映写室にも人の気配はない。いや、何かが動いた。：誰かはいるんだな。：天井には往年のスター達の写真が壁の染みのように張り付いている。重い扉を開けると光の粒子でいっぱい。空気が顔を打つ。音も大きい。椅子の背から浮かんた頭の影が、ひとつ：ふたつ：みつ：。私はよつつめの影になる。椅子は堅く、スプリングの骨組みが感じ取れる。堆積した記憶の匂い。いい思い出ばかりとは限らない。スクリーンには女優のクローズアップ。モノクロ画面の淡い光と影のなかで発情している。広い額。大きすぎる目。ぽつてりとした唇の小さな口。細い首。光るナイフの刃。トレンチコートの腰に添えられた銃口。雨に濡れた夜の舗道。女の裸の背中也汗ばんで濡れている。割れるガラス。誰もいない部屋の籠のなかのカナリヤ。私はただこの世で最後に見る光景のショットを映画のなかで探そうとしている。呼吸が停まった時に見

るショットが最期の光景というわけだ。だからストーリーはいらないんだ。あらゆるジャンルのショットが散りばめられている。象の行進。森の中の少年。白いシーツの血。海亀の産卵。接吻の後の唾液の橋。フィレンツェの夕日。山肌の断崖絶壁。走る列車。衝突する車。入浴する女。また女優のクローズアップ。スクリーンという皮膚を移植された女優の一生が幸福に終わるわけがない。彼女達に嘲られ続けた映写技師だけがそのことを知っている。光のイデオロギーと影の綱領から成るこの帝国に私は忠実に生きて来た。帝国の番人は俳優達の栄光の記憶に埋もれて死ぬ。：どうということのない人生だ。退屈な一生だった。生命の意味とは何だ？退屈であることを知ること、私にはそうとしか思えない。労働の意味とは何だ？いや、私が働いたなんていうことは嘘だ。わかってきたぞ、映画を回すっていうことは死を生きるってことだったんだ。わかっていたんだ。このシャシンを最初に見た時から予想ができていた。なんという名の名画座なんだろう。最後にそれだけを知りたい。誰も教えてはくれないんだな。当たり前だろうな。死ぬ時は誰でもひとりだ。それなら自分で名付けてやろう。ここは映写技師の墓場だ。墓場座とでも呼んでやろう。

若い女はフィルムを巻き終えて、老人の話すのに聞き入っている。

若い女　でも意味はあるわ。

老人　どんな意味が？

若い女　あなたという存在がこの世にたったひとつだということ。

老人　いいや。実は映写室にはもうひとりの私がいるんだ。

若い女　それが死にたい理由？

老人　そうだ。

若い女　映写室に行つて確かめたの？

老人　いいや。

若い女　なんで行つて確かめないの？

老人　きつと、恐いんだな。

若い女　一緒に行くわ。

老人　そんなに言うなら行つてみようか。

若い女　うん。

老人　ところでそのアイパッチはならず者かなんかのつもりなのかね。

若い女、はつとして引つ込む。その間老人はぐったりする。若い女はアイパッチを取つて戻つて来る。老人の様子に気がつき、急いで近寄り息を確かめ、心

臓に耳を当てる。心臓マッサージをする。女が入って来る。

若い女 （女に）押さえてて！

女 （老人の体を押さえて）あなた…。

次に若い女は人工呼吸を施す。

女 どういうつもり？

若い女 連れてくわ！

若い女と女、老人の乗ったストレッチャーを押しながら去る。

5. ギルダ

暗闇のなか、テレビモニターに若い男が映る。眠りながら苦しみ、うなされて
いる。明るくなると同時に映像は消えて行く。若い男が手錠をはめられ、目隠
しをされ、椅子に縛られている。ぐったりと頭を垂れている。女がやって来る。

女 ひどい顔ね。

若い男は反応する。

女 得意の悪態も無理ね。

若い男 満足だろ。

女 血がついてる。

女はキスする。若い男はツバを吐く。

若い男 消えてくれ。

女 そう簡単にいくもんですか。恨んでる、あたしのこと？

若い男 いや。俺はこれでいい。

女 通報したのはあたしよ。

若い男 俺はあんたが憎い。死ぬほど憎い。

女 やっぱりそうなんじゃない。

若い男 自分のことじゃない。あんたは妹から無垢と純潔を奪った。

女 頭の固い父親みたいな言い草ね。彼女はあなたから逃げたがっていた

わ。

若い男 あんたに洗脳されたんだ。

女 幸せね、彼女。こんなに愛されてて。

若い男 あんたは妹を破滅させた。

女 楽しんだわ。

若い男 憎しみだけが俺を興奮させる。

女 素敵よ、テロリストさん。

若い男 ただの殺し屋だ。

女 謙虚なこと。

若い男 イデオロギーも宗教もアリバイに過ぎなかった。

女 寂しいことを言うもんじゃないわ。好きだったのに、語るあなたが。

若い男 あんたにとつちや暇つぶしのアバンチュールってところだろ。金持ちのペット。

女 あたしだって危険な橋を渡ってるのよ。あなたがあたしのことをしゃべれば全部アウト。

若い男 俺は絶対しゃべらない。あんたはそのことをよく知っている。

女 なぜしゃべらないの？テロリストの意地？

若い男 テロリストだったらしやべるだろう。あんたへの報復として。俺は殺し屋のルールを守る。信じてもないことを語っていた。俺はいつだってからっぽだった。語ったそばから抜け落ちていく言葉、言葉、言葉…。

女 大切なのは言葉。

若い男 あんたは政治家だからな。言葉があることを俺に教えたのはあんただ。俺はそれで少しは救われたような気分になっていい気になっていたんだ。ただのからっぽのくせに。

女 あなたのからっぽには意味があった。せめてそう思わせていてちょうだい。そうでないとあたしとあなた、惨め過ぎやしない？

若い男 俺は惨めでいいんだ。

女 そんなことを言うのなら、あたしのことをしゃべって。逮捕させて。そしたら言うわ、党首とテロリストの命を賭けた逢瀬だったんだと。欲求不満の人妻と異常者のどたばたをか。

女、若い男の頬を張る。

若い男 変革の意志。資本主義の倫理。…この国は変わらないよ。

女 （若い男を見つめ）また血が出てきた…。

若い男 所詮古ぼけた物語だったのさ。

女 あたしのこと？

若い男 俺のことだ。仲間を殺したんだ。自分が何をしていた何を望んでるのか分かってうとして殺したんだ。だが、ますます分からなくなるだけだった。その頃だ、あんたに会おうと決意したのは。

女 なぜ？あの子を取り返そうというそれだけの理由で？

若い男 最初はそうだった。俺がこんなふうでしかないのは妹がいなくなったせいだと考えた。妹が俺のイデオロギーで宗教なんだ。俺の前に立ちはだかった壁があんただった。俺はその壁に跪き、顔をつけて泣いたんだ。あの子が冷たかったからでしょう？

若い男 …。

女 裏切られたのよ、あなたも。あたしと同じように。それでいいのよ。それを望んでいたのよ。

若い男 あんたが、裏切られた？誰に？

女 多分あたしは政権を取れない。あなたが言ったように。

若い男 俺が言った？

女 ええ。

若い男 覚えてないな。

女 あなた、壊したかったのなら、一切合財壊せばよかったのよ。何も考えずに。

若い男 あんたが俺に言葉を寄越したせいだ。

女 情けない姿。

若い男 売ったのはあんただろう。

女 いい気味だわ。血と汗、よだれまみれ。臭くて。少壮のテロリストも形無し。

若い男 …ギルダ。

女 他の女のことを思い出さないで。

若い男 ファム・ファタール。

女 映画のことね。

若い男 運命の女。

女 ここで映画のことを口にしないで。

若い男 あんたのことさ。初めて告白しよう。俺が名付けたあんたの暗号名、ギルダ。「今日ギルダに会った」「明日ギルダに会う」

女 …（近づき）やっとなあたしのものになった。（若い男のズボンのなかに手を入れる）

若い男 …やめてくれ。

女 動けなくなったあんたのなかで、ここだけが動いてる。

若い男 やめろ。

女 動いてるよ、あんた。

若い男 …やめてくれ。

女 何かしゃべって。そしたらやめるわ。

若い男 …小型飛行機。

女 …小型飛行機？

若い男 旅客機は大きすぎるし、土台乗客を道連れにするアリパイなど俺にはない。…だから、小さな、セスナ機でいいな…奪って、あんたと俺でそれに乗って…

女 あたしと？

若い男 街の上空を何度も旋回して、クソのような街を飽きるほど眺めて、夕暮れ近くに…。

女 夕暮れ近くに？

若い男 どこかのビルに突っ込む。

女 ビル？

若い男 街で一番目障りなビルだ。あんたはどのビルがいい？あんたの言う通りにするよ…答えてくれ、どのビルだ…ああ、ギルダ…。

女 やめて…。

若い男 俺はあんたを憎んだ。片時も忘れられず、気も狂わんばかりに。

女 映画はやめて！

若い男 ギルダ！

若い男はぐったりする。女は若い男から離れてハンカチで手を拭く。

女 帰るわ。

若い男 嘘さ。あんたはギルダじゃない。ただのマミーだ。

女 無期か死刑ね。あなた。

若い男 …死刑がいいな。虹の歌を歌いながら首に縄をかけられるんだ。

女 現実は無残なものよ。

若い男 苦しむのかな。

女 すぐには死ねないらしいわ。

若い男 嫌だな。でも自分の映画なら仕方が無いか。

女 なんてそうみんな映画が好きなの。

若い男 あんただって。

女 嫌いよ、あたし。

若い男 特別なんだな。

女 どうかしらね。…さよなら。(去る)
若い男 …さらば美しき女よ、か。

謎の女がステッキをついて現れる。若い男の手錠を外し、目隠しを取る。

謎の女 (若い男が何か言おうとするのを制し) 静かに。(さらに椅子から解放

し) 死ぬにはまだ早過ぎるよ、あんた。行きな。夜の闇に。

若い男 …。(戸惑っている)

謎の女 何を聞いても無駄だよ。あたいはあのジジイから言われてやってるだけなんだ。ジジイには借りがあるからね。

若い男 世界がカラー画面になってる。血の色を見せたいんだな。

謎の女 さあ、とつとと行けよ。

若い男、走り去る。謎の女は葉巻を取り出して火をつけようとするが、何か気配に気がついて立ち去る。

6. キスで殺せ

男が歩行補助器でやって来る。反対側から老人が徒歩で現れる。

老人 やあやあ。これはこれは。

男 どうも…。

老人 (男の様子を観察しつつ) いやいや、あなた、そういうことでしたか。こりや楽じゃないな。

男 (呟く) うるせいな。…元気じゃないの、あんた。

老人 だから厄介なんだ。あなたはあれからどうしました？

男 どっちのことを聞いているんだ。

老人 どっちのこと？

男 映画のことか、実生活のことなのか？

老人 どっちでもかまやしないんだがね。

男 何も無しだ。全部が全部手詰まり状態だ。

老人 ここいらでひとつあなたも脇役だけに徹してみてはどうです。私はそう決めました。一緒にどうです？

男 どこまでが誰の世界かもわからないんだ。

老人 私はもう自分の映画は十分だ。信じられるかな、死の世界も体験したよ。積極的な死はいらなくなってしまう。いつ死んでもいいし、死ななくて

もいい。他人の映画に奉仕することに決めた。結局映写技師の仕事ですな。
やっぱり天職だったんだ。

男 死の世界を体験した？

老人 ええ。仮死状態でいました。

男 何かを見た？

老人 映画を見ていました。

男 何の映画？

老人 見たことのない映画だった。これから撮られる映画なんだろう。

男 どうだった？

老人 おもしろかったよ、とても。

男 頼みがあるんだが。

老人 なんなりと。

男 俺を殺してくれないか。

老人 ここで？

男 そうだ。今すぐ。

老人 映画のなかじゃないだろう。

男 さつきどっちだろうがかわわないと言ったじゃないか。

老人 ここにはストーリーがない。

男 そんなに重要なのか。

老人 やはり上手に死ぬには必要なんだ。

男 上手に殺してくれないか。

老人 無茶を言っではいけない。タイトルの無い殺しに付き合えるもんかね。

(去る)

男は呆然としている。女とナビゲーターが現れる。女は憔悴して車椅子に乗って、それをナビゲーターが押している。

ナビ まだいたの？

男 やっぱり俺はここで死ぬしかないんだ。

女 あたし席外したほうがいい？

ナビ かまわない。いて。

男 探偵が失格というなら他の役でいい。贅沢は言わない。何でもいからやらせてくれ。

ナビ (笑い) 何でもいいだなんて、贅沢そのものじゃない。

男 探偵でなくてもいいと言いたかったんだ。

ナビ じゃあ何をやるの？

男 わからない。
ナビ 無理ね。

男 そこいらをなんだかふわわしているだけの役でいい。
ナビ あなたの問題点は役がどうのということではないの。自分の主観のときは何をどうしてもかまわないと言ってるでしょう。でもそれさえも満足にはこなせない。「わからない」ばかりを口にする探偵。それよりも一番の問題は他人が主観のとき、あなたは合わせられない、その社会性というか協調性の無さが困ると言ってるの。帰って。最初にあなたを無理と判断したんだから、自分の勘を信じ続ければよかった。(車椅子を押して去ろうとする)

女 待つて。ここにいさせて。

ナビ 私はもう嫌。

女 いいわ。

ナビ 余計なこと吹き込まないでよ。(去る)

男 …ちきしょう。

女 似てる。…別れた亭主に。…不器用で失敗ばかりしている…暴力男。

男 そいつあ、わるうござんしたね。

女 …ふられ続けの人生ね。

男 俺のことか？

女 あたし。

男 その暴力亭主にふられたのか？

女 いいえ。あたしから出て行った。

男 それならいいじゃないの。

女 あたしは今幸せよ。

男 いいじゃないの、幸せならば。

女 ふられ続けよ、人生に。もうすぐ死ぬのよ、あたし。

男 私も死にます。

女 そうじゃなくて、病気で死ぬのよ。でもここにいるのは安楽死を望んでるってわけじゃないの。病気に負けて死にたくない。自分の意思で死にたいの。

男 権力を味わってから、か。

女 成り上がりの女の映画。軽蔑してるんでしょう？

男 好きなジャンルではないな。

女 あなた、探偵を続けなさい。

男 俺がそう思っても…

女 あたしがそうさせるわ。あなた、ベッドでは素敵だったわ。

男 …記憶にございません。
女 あなたの映画では省略されたのね。
男 残念至極。

女 本当にそう思ってるの？
男 こんな体で嘘を言っても仕方がない。
女 その理屈よくわからない。

男 自信がまた無くなってきた。やりたいのはやまやまなんだが。ナビの言う通りだ。俺は役を演じることができない。映画のなかだけのことじゃない。これまでの俺と同じだ。人生のなかで俺は演じるべき役をまっとうすることができなかった。いつもこれは自分ではないと思い、だからといって本当の自分がどこかにいるはずだと信じたわけでもなく…

女 そう。不器用で失敗ばかりの、暴力男、だらしない夫、頼りにならない父親！

男 そっくり。

女 こうやって息をしているだけでも苦しい！

男 演じるのよ。
女 できない！

女 誰にだってできる、簡単よ。演じるの、演じ続けるの、死ぬまで。…あなたが必要なの。破滅に向かわせて。

男 俺が必要…嘘だろ？

女 華々しい破滅に向かわせて。

女 は車椅子から立ち上がり、男の歩行補助器を奪う。男は立っている。女は男に抱き着く。

女 恐かった。もうひとりにしないで。

男 …何があつたんだ？

女 いつも誰かがどこからあたしを監視してる。扉の影。窓の外。隣のテーブル。弱みを見つけて引きずり下ろそうとして。

男 黒幕は？

女 見つけてよ。あなた、テープは？

男 (曖昧に) ああ。

女 取り返せたの？

男 まあな。

女 あたしに返して。

男はビデオテープを取り出す。女が取ろうとするのをかわす。

女 何？

男 どうも合点がいかない。

女 どういうこと？

男 なんでこのテープが重要なんだ。

女 中身は見たんでしょう？

男 いや。

女 見てない？

男 ビッグ・バッド・マミーから聞いただけで。

女 ビッグ・バッド・マミー？

男 会ったんだ。

女 そう：そうなの。

男 何か都合が悪いことでも？

女 ビッグ・バッド・マミーは何か言った？

男 あんたが同性愛者だと。俺とのことはやっぱり計算づくだったんだな。

女 女を抱くことが悪い？

男 悪くはない。まったく。

女 それならいいじゃない。

男 そうだ。だからこのテープをあんたは恐れる必要などない。そうじゃないか？あれからあんたのことは随分調べさせてもらった。本も読んだ。そのなかの一章は同性愛者差別への強い抗議で費やされている。大方の読者ならあんた自身が同性愛者であることは想像できるつもんだ。世間はあんたが同性愛者であることを認めているはずなんだ。そこでこのテープがそんなに重要なのかということだ。裸が映ってるからか？そんなことがスキヤンダルになったぐらいで潰されるあんたか。誰でもやるときは裸だ。公表されたところで逆にさらにあんたの人気は高まる可能性だってありやしないか。しかも絡みの相手は今もあんたのれっきとした愛人なわけだろ。そこで俺は考えた。一体なんだっていつもこいつもテープ、テープと騒ぎ立てているのか。つまりこういうことだ。テープにはあんたと若い女の絡み以外の何か重要なことが撮られている。

女 何が撮られているの？

男 例えば殺しの証拠となるもの。それをネタにビッグ・バッド・マミーはあんたをゆすった。風呂場の死体はマミーの手下だった。あんたにとっちゃあれは最初の殺しではなかった。

女 きれる探偵じゃない。

男 どういたしまして。

女 なぜテープを見てないの？

男 忙しくってね。

女 駄目な探偵。

男 直感が自慢だからな。それだけで十分やっていけることに気がついた。動物
的直感ってやつ。(拳銃を取り出し) おい、隠れてないで出て来いよ。

微笑む若い女が現れる。

男 あんたか。

若い女 どうするの、そのテープ。

男 そこが考えどころだ。

女 あたしをいじめてそんなに楽しい？

男 近づくな。

若い女 バカね。

男 俺のことか？

若い女 テープはそれだけだと思ってるの？(片目を手のひらで覆い隠し、ステ
ッキを持つてる仕草をして)テープはそれだけだと思ってるのかい、探
偵さん。

女と男はほぼ同時に驚愕の声を上げる。

若い女 あんたの持つてるテープはあたいがジジイにやったコピーさ。オリジ

ナルは今頃新聞社に届いてるだろうさ。

女 どういうことよ！あんたは誰？

若い女 終わりだね、ビッグ・バッド・マミー。

男 ビッグ・バッド・マミー？

若い女 そうだよ。この女のことだよ。

女 仕組んだね。

若い女 (若い女に戻り) お姉ちゃん、ごめんなさい。ずっと隠してて。あなた
を滅茶滅茶にする機会をずっと探してたの。(謎の女になり) そっくり
だろ。演技の猛レッスンの賜物さ。あんたの有能な右腕だった片目の女。
あんたに棄てられたあたいは拳銃で頭をぶち抜いて死んじまった。そ
のときからあたいの娘はあたいになったのさ。

女 娘！

若い女 あんたには言わなかった。自分の娘を売春させる母親と思われるのが嫌だったもんでね。娘にも言い聞かせたんだ。あんたが娘を愛し始めたのを機会に親子の縁は切っちゃおうと。そのほうが娘には幸せだろうって踏んだのさ。凶星だったね。あんたは今や立派な女党首だ。でも、あんたは全部を欲しがり過ぎた。欲しいものを手に入れ過ぎた。そう思わないか、ビッグ・バッド・マミー。あたいと勘違いしていたね、探偵さん。テープを見ておくべきだったんだよ。そうすればこの女がマミーだつてことがすぐにわかったのによ。

女 だからヘボ探偵だつてんだよ。

呆然としている男から若い女は拳銃を奪う。

女 どこまでもヘボ！

若い女 （若い女に戻り）動かないで。お姉ちゃん、あなたは今からここで記者会見を開くの。全部を洗いざらい話すの。（携帯電話を取り出し）さあ、電話をして。

女は電話を受け取る。

若い女 03：DDFE：FOOK。

女 ……もしもし、そちらはどちら…ああそう。あたし…

車椅子に乗った老人が現れる。盲人だが拳銃を構えている。車椅子は若い男が押している。

老人 羨ましい。あんたがたは本当に羨ましいよ。感情というやつが満ち溢れている。生きている実感だ。（若い女に）いい子だからそんなものはしまいなさい。

若い男 もう十分だ。おまえの仕事は終わった。後は俺に任せてうちへ帰るんだ。そうだ。うちへ帰るのが一番かも知れない。

若い女 うちなんか…うちなんか、ないじゃない。帰るところなんかないじゃない。狡い。やってきたこと、みんな忘れたふりをして。

女 （電話に）助けて！

若い男 無駄だよ、あんた。俺はもう犯行声明を流しちまった。退路は断たれた。あんたと俺は一緒だ。あんたを憎んでも憎み切れない。俺は母親から愛されなかった子供だった。（若い女に近づき）もういい、もういいんだ。

（若い女の拳銃を静かに取り上げ。女に銃口を向け）もうすぐ屋上にヘリコプターが到着するだろう。あんたと俺はヘリに乗って飛行場まで飛ぶ。そこにセスナ機が準備されているだろう。ほうら外がざわわいっている。警官やら機動隊やらが集まり出したんだろう。テレビじやどの局も生中継だ。ん？これは誰の映画なんだ？

遠くからヘリコプターがやってくるのがわかる。やがて爆音で恐らく台詞も聞こえなくなるだろう。若い男は女に拳銃を突き付けて部屋から出ようとする。男が老人の拳銃を奪って若い男に銃口を向ける。男と若い男は互いに銃口を向けて見合っている。女が若い男の拳銃を奪おうとする。もみあつて若い男は女を撃つ。女は倒れる。それを確認した若い男は銃口を自分のこめかみに当てる。それを若い女が止める。若い男は振り払い、撃つ。若い男は倒れる。爆音がぴたりと止む。

老人　：羨ましい。本当に羨ましい…。

女　（虫の息で若い女に）歌って。虹の歌。

若い女　だめよ、死んじや！

若い女は女に駆け寄り、抱く。

女　あたし、幸せよ。だから、歌って。

若い女、虹の歌を歌い始める。女は動かなくなる。男は歌の最中、その世界から離れていく。虹の歌がゆつくりフェード・アウトしていく。歩行補助器で体を支えた男が現れる。

男　一本の映画が終わった。最初に意識を取り戻したのは俺だった。生き抜いたという実感が残っていた。若い男の最後の台詞が妙に引っ掛かっているのがわかった。これは誰の映画かということだ。やつの焦りに比べて俺にはその重大さがわかってはいなかった。

他人の映画のなかでは人は完璧には死なない。映画のなかで全員が死んだときのことを想像した。意識を取り戻して人は自分の映画ではなかったことを確認するって寸法だ。部屋は暗がりのなかにあった。俺はじっと待った。誰かが咳をするのが聞こえた。これまでの人生で出会った女達の顔を思い浮かべた。知らないうちにまた俺は眠ってしまった。だが、映画はもう現れなかった。目覚めると部屋はすっかり明るかった。

車椅子の女を中心にナビゲーター、老人、若い男がいる。女は絶命している。男はその輪のなかに加わる。

男 彼女？

老人 どうやらそのようすな。

ナビ …ちきしょう。

一同、そのナビゲーターの眩きに注視する。

老人 まあ、遅かれ早かれこの人はこういうことになっていたんだし。

ナビ この人の病気は狂言よ。

若い男は走り去る。

男 彼女は動かなかった。数分前まで声を発していた唇はもう二度と動かない。当たり前の現実には戸惑い、始めて人の死に接したかのように声をなくしていた。そうやって遺体の側で呆然としている自分を見ている別の自分の視線があった。…これもまた映画なのか。そのこと願った。再び映写機のフィルムが回りだし、彼女の唇から声が発せられることを。（男は歩行器を離す。転倒する。すごごと立ち上がる）とりあえず俺は死ななかった。

男の語りの最中に老人は女に合掌して立ち去っている。

ナビ 救えなかった…。

男 あんたは十分救ったよ。

ナビ …。

ナビゲーターは女の車椅子を押して去る。

7. エピローグ

男は尚も語り続ける。

男 それからクラブには二度と戻らなかった。残ったふたりがどうしたのか、クラブで死んだのかは知らない。これが二カ月後の俺。見たところ何も変わら

ないが、生活が変わった。職を見つけた。こんな体の俺を管理人で雇ってくれるアパートがあった。この国も、いやこの人生も捨てたもんじゃない。

男は電話のある机の前に座る。

男 古いが頑丈なアパート。一階はホームレスの施設として都が買い取っている。三、四人の共同部屋でみんな年は俺と同じくらい。ひとりのジイサンは一人暮らしを主張して頑として譲らない。なんでも現金をたんまり貯め込んで畳みの下に隠してゐるって噂だ。二階には物好きで貧乏なガキどもが三人ほどいるが、三階は全部空き部屋だ。

電話が鳴る。

男 (受話器を取り) はい。なんたらアパートです。…は？スーさん？スーさんの本名は？…わからない。あの、こつちもスーさんじゃわからないんだけど。105号室。はあ。じゃあ、ちよつと待つて。(奥に) 105号室のスーさん！105号にスーさんって人はいるか！スーさん！105の！

奥から年寄りの「うるさい！」という声。

男 いないみたいだよ。はい、それじゃあ。(受話器を置き、奥に向かって) 悪かったな！

また電話が鳴る。

男 はい。なんたらアパート。え？女？珍しいなあ。…事務所兼集会用？なんだか変な宗教団体かなんかじゃないんだろね。…はあ、今から。まあ、いることはいるけどね。そりゃあいつだっていますよ、俺は。わかりました。(受話器を置く)

ナビゲーターがやって来る。黒い大きな鞆を持っている。

ナビ 部屋の下見に来た者ですけれども。

男 おつ、早いなあ。(見て) あんた…。

ナビ (無視して) 管理人さんですね？

男 はい。

ナビ 三階を見せてください。

男 …。

ナビ 三階の305号。(苛立ち) 勝手に見ますから、鍵をいただけませんか？

男 俺のこと覚えてないか？

ナビ 鍵を貸してください。

男 今度はここにクラブを？

ナビ 帰ります。

男 今鍵を…。

ナビ けっこうです。他を当たりますから。

男 俺にも手伝わせてくれ。

ナビゲーターは無視して行こうとする。

男 ありがとう。

ナビゲーターは立ち止まる。

男 死なせるためじゃない、死なせないためのクラブなんだろう？

ナビゲーターは鞆からビデオテープを取り出す。

ナビ あなたの未完の映画。(とテープを男に投げる) ごめんなさい。フィルム
じゃなくて。(去ろうとする)

男 訪ねてくれたのか？

ナビ 偶然持っただけ。

男 どこへ行くんだ？

ナビ 忘れなさい。(去る)

男は追おうとするが転倒する。諦めて椅子に座る。眩くように虹の歌を口ずさ
む。奥から年寄りの「助けてくれ！」という悲鳴が聞こえる。サングラスにキ
ヤップを被った若い男が手に何かを抱えて走り抜けようとする。

男 ちょっと待て！

男は机の引き出しから拳銃を取り出し、歩行補助器なしで椅子から撥ねるよ
うにして立ち上がる。若い男は反射的に男を撃つ。

若い男 あっ…あんだ。

若い男は走り去る。男は撃たれた衝撃によるめきながら椅子に座る。苦しんでいる。息をしているのか、していないのかはわからない。ナビゲーターが走って戻って来る。

ナビ 今銃声が…

男 やられた…。

ナビ 何をやってるの。どうしたいの？

男 生きる…。

ナビ 生きたいの？

男 生きたい。

ナビ 本当に？

男 …ああ。

ナビゲーターは男の背後に周り、両手を男の肩に置く。

ナビ 目を閉じて…開いて…見て…映画の終わり。

ふたりは正面を見つめたまま、宗教画のなかで描かれた人物のように停止している。

幕

*映画「ギルダ」から一部台詞を引用させていただきました。

※本戯曲の使用・上演を希望される場合は左記宛にご連絡ください。

川村毅著作権管理 株式会社ティーファクトリー info@tfactory.jp

東京都新宿区西新宿 3-5-12-405 Tel.03-3344-3005 2019年10月現在